

An Analysis of Home Economics Teacher`s Problems and Requirement Using Text Mining

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): problems of class practic, home economics teacher, text mining, collocation networks 作成者: 永田, 晴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6342

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



グループワークの記録を事例とした家庭科教員の 授業実践課題

永田晴子
大妻女子大学家政学部被服学科

An Analysis of Home Economics Teacher's Problems and Requirement Using Text Mining

Haruko Nagata

Key Words: 授業実践課題 (problems of class practice), 家庭科教員 (home economics teacher),
計量テキスト分析 (text mining), 共起ネットワーク (collocation networks)

要旨

家庭科教員が抱えている授業実践の課題を明らかにするため、授業を行う中での悩みや困っていること、不満や要望についての記述内容をもとにテキスト分析を行った。家庭科教員を対象としたグループワークの記録を事例として、658 件の記述内容を分析対象とした。計量テキスト分析の手法を用いて、可視化された共起ネットワークの図をもとに家庭科教員がもつ授業実践の課題について分析を行った。分析の結果、授業実践の課題として考えている事柄は、「時間」「施設・設備」「授業の進め方」「教科の位置付け」の 4 つにカテゴリ化された。また、テキストデータを可視化しながら全体像を捉えていくことで、生徒の学習意欲や技能の実態が指導方法や学習内容に影響を与え、思うように授業が進められず、教員がねらいとする授業を行うことができないことにより生徒の知識や技能が低下し、生徒は「できない」「わからない」ことにより学習意欲が低下していくという悪循環がくり返されている様子を確認することができた。

1. はじめに

平成 20～21 (2008～2009) 年度に改訂された学習指導要領は、平成 23 (2011) 年度より小学校、中学校、高等学校と順に年次進行で実施され、本年度で全ての学校段階および学年において実施されていることになった。現行学習指導要領では、教育基本法改訂等を踏まえ、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を学力の三要素として掲げ、知・徳・

体のバランスのとれた「生きる力」をより効果的に育成することをねらいとしている。現在、中央教育審議会では学習指導要領の時期改訂に向けた審議が行われ始めており、平成 27 (2015) 年 8 月に開催された中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会では、初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について審議されている。改訂の視点として、現行学習指導要領では「確かな学力」として「思考力・判断力・表現力等」を育むための手立てとして言語活動の充実に重点が置かれていたが、次期学習指導要領では、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか (主体性・多様性・協働性・学びに向かう力・人間性など)」「何を知っているか何ができるか (個別の知識・技能)」「知っていること・できることをどう使うか (思考力・判断力・表現力等)」を育成すべき資質能力の三つの柱として、「どのように学ぶか (アクティブ・ラーニング)」「学習評価の充実」「カリキュラム・マネジメントの充実」を挙げて審議が行われている。審議中の経過をみると、次期学習指導要領の方向性として、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」が挙げられており、各教科の中で、どのような力が身に付くのかをより明確に示すことが求められていることになる。

学習指導要領において身に付く力が示されることにより、学習の到達目標がより明確にされることになる。教員には、学習内容や学習方法の改善だけでなく、様々な点で教育の質を高めていくが必要になってくるだろう。そのためには、現在の教育現場において、教員が授業実践において抱えている課題を明らかにし解決していくことが求められる。先

行研究では、家庭科教員が抱えている授業実践の課題として、履修単位数や教員配置、実験・実習設備等の学習環境に関わる問題が挙げられている。現行学習指導要領では、中学校における家庭科の授業時数は、「技術・家庭」で第1学年70単位時間、第2学年70単位時間、第3学年35単位時間となっている。そのため、第3学年の家庭科の授業時数は17.5単位時間となり、第1・2学年に比べて第3学年の授業時数不足や0.5単位時間の取扱い方の課題がある。また、高等学校における共通教科としての家庭科の標準単位数は、「家庭基礎」2単位、「家庭総合」4単位、「生活デザイン」4単位となっているが、現状では、この中で多く履修されているのは「家庭基礎」2単位である。平成15(2003)年に必修教科として「家庭基礎」2単位科目が設置されて以降、高等学校家庭科における履修単位数減少による授業時数不足の問題は指摘され続けている(日本家庭科教育学会家庭科教育問題研究委員会, 2007、野中他, 2011、長澤他, 2011、野中他, 2012)。

授業時数の問題は、教員個人の努力だけでは解決しきれない部分もある大きな課題である。その他にも、家庭科教員が授業実践において抱えている課題には様々な内容があることが予想される。そこで、本研究では、家庭科教員が日頃感じている、授業を行う上での悩みや困っていること、不満・要望などを通して、授業実践の課題を探ることを試みた。困っていることとして記述されている内容を通して、家庭科教員の授業実践課題を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1 対象

平成25～27(2013～2015)年8月に大妻女子大学にて開講された教員免許状更新講習で実施した中学校・高等学校教員向け講義におけるグループワークの記録を対象とした。実施時期は、平成25(2013)年7月30日、平成26(2014)年8月1日、平成27(2015)年8月5日である。受講者97名(2013年32名、2014年33名、2015年32名)、658件の記述(2013年220件、2014年232件、2015年206件)について分析を行った。

2.2 方法

グループワークの記録をもとに家庭科教員が抱えている授業実践課題の事例をデータ化し、計量テキスト分析の手法で内容分析を行う。記述内容より、

頻出語の傾向と、共起ネットワークによる可視化されたモデルを通して授業実践の課題と解決策について考察する。

分析ソフトは「KH Coder」を利用した。テキストデータを可視化しながら分析できること、フリーソフトとしてWeb上で入手可能であること、このソフトを利用した研究も多くみられること、操作方法が簡便であること、使用方法のテキストが刊行されていること、Web上にチュートリアルや使用方法のQ & Aなどの情報が多く提供されていることなどの理由から、この分析ソフトを利用することにした。

2.3 対象としたグループワークの概要

分析対象としたグループワークは、中学校・高等学校教員向けの教員免許状更新講習必修科目「教育政策の動向についての理解」の講義中で実施されたものである。

グループワークは次の手順で実施した。まず、2色の付箋(7.5 cm×7.5 cmサイズの付箋をブルーとピンクまたはブルーとイエローの組み合わせで使用)を用意し1人5枚ずつ配布する。ブルーの付箋には「困っていること(授業実践の課題)」について、家庭科の授業を行う上での悩みや困っていること、不満・要望などを1枚につき1事項ずつ記入する。ピンクの付箋には、「授業のアイデア・工夫(課題解決の糸口)」について、家庭科の授業のアイデアや工夫していること、生徒の反応が良かった授業例などを、1枚につき1事項ずつ記入する。「困っていること」については、1人3枚以上は書くよう指示し、5枚以上ある場合には、必要なだけ付箋を渡し記入してもらう。「授業のアイデア・工夫」については、1人1枚以上書くよう指示し、5枚以上ある場合には、必要なだけ付箋を渡し記入してもらう。

付箋への記入が終わったら、5・6人1班のグループに分かれ、自己紹介をしながら、自分の書いた付箋を模造紙の上に貼り、書かれている内容について紹介する。付箋は後で整理するので、ここでは、自分の好きな場所に付箋を並べていく。全員の付箋が貼り出されたら、KJ法の方法で付箋の内容を整理していく。まず、「困っていること」をグルーピングしていく。いくつかのグループに整理されたら、その内容に対する解決策と思われる「授業のアイデア・工夫」も合わせて整理しカテゴリー化していく。最後に、整理された付箋を線で囲み、それぞれのカテゴリー名を考え記入する。

グループでの整理が終了したら、全てのグループの模造紙を黒板に貼り出し、それぞれのグループで整理された内容について発表し全体で意見を共有する。ここまでの作業を、60～80 分の時間で行っている。また、授業時間内で、各グループの付箋内容の詳細を回覧することが難しいため、授業終了後に見られるよう、休み時間中は黒板に掲示したままにし、自由に閲覧できるようにしている。

2.4 データ加工の手順

グループワークの記録をもとに、実施年、班、カテゴリー名、困っていること、授業のアイデア・工夫について、付箋 1 枚を 1 項目として記述内容を Excel シートに入力し、テキストのデータ化を行った。

計量テキスト分析を行うあたり「KH Coder」を利用した。このソフトを利用した理由については、先に述べた通りである。「困っていること」のテキストデータについて、「抽出語リスト」コマンドを実行し、頻出 150 語をリストアップした。頻出語の分析では、「家庭基礎」という言葉が「家庭」と「基礎」に、「被服実習室」が「被服」と「実習室」といったように 2 語に分かれて抽出されているものがある。そこで、語の取捨選択の状況を確認するため、「KH Coder (茶筌)」を利用して複合語の検出を行い、分割されて抽出されている語を 1 つの語として抽出するよう「分析に使用する語の取捨選択」コマンドにて「強制抽出する語の指定」に追加した後、再度「抽出語リスト」コマンドを実行し頻出語の出力を行った。

再度リストアップされた頻出語には、「生徒」「子どもたち」や「調理実習室」「調理室」などの同義語が存在していた。KH Coder では、同意義語を含めた語句の抽出機能はなく、同義語をまとめて 1 つの語として集計する際には、「コーディングルール」を作成する必要がある。しかし、コーディングされた語の分析は、コード間での分析となる。KH Coder には同義語分析の機能はない。そのため、本研究の分析データは 658 件と、膨大なテキストデータというわけではないため、同義語と思われる語については Excel データ上で置き換えを行うことで修正することにした。その際、KH Coder の「抽出語検索」コマンド内における「KWIC コンコーダンス」機能を用いて、文中における語の使われ方を確認しながら、置き換え可能な語にはマークを入れてから置き換える処理を行った。この「KWIC」とは、Key Word in Context の略でありコンコーダンスとも呼ばれ、検索語が分析対象ファイル内でどのように用いられて

いたのかを確認することができる機能である。

3. 結果

3.1 テキストデータの概要

グループワークの記録をもとに、前述データ加工の手順にて処理を行ったテキストデータの概要は、表 1 の通りである。文の数を延べ回答件数で割った値で示される 1 件あたりの文の数は、「困っていること」2.2 文、「授業のアイデア・工夫」2.2 文であった。また、総抽出語数を文で割った値で示される 1 文あたりの単語数は、「困っていること」7.7 語、「授業のアイデア・工夫」9.3 語であった。グループワークでは、「困っていること」「授業のアイデア・工夫」について、それぞれ 1 事項 1 枚の付箋に書き出して行くよう指示していた。また、記述する付箋の大きさも 7.5 cm×7.5 cm とあまり大きなサイズではない。そのため、1 件あたりの文の数は 2.2 文となっているが、単語の羅列に近い、箇条書きや短文の組み合わせで構成されている文になっているものと考えられる。

3.2 「困っていること」の分析結果

「困っていること」として挙げられていた内容は 386 件であった。抽出語コマンドにより抽出語リストの作成を行った。抽出語の出現回数上位 150 語の結果が表 2 である。出現回数をもっとも多かった語は「生徒」、次いで「授業」「実習」「授業時数」となっていた。また、形態素解析による品詞別の抽出結果のうち、名詞（複合名詞を含む）、サ変名詞、形容詞、形容動詞の頻出語のリストが表 3 である。表 2 にて出現頻度の高い語の内、「生徒」「授業時数」「調理実習」「内容」「被服製作」は名詞であるが、「授業」「実習」「指導」「不足」「準備」などは、サ変名詞（「～する」が後ろに付くと動詞化する名詞）に分類される語となっていた。また、表 2 で頻出語の上位にある「時間」は、形態素解析では副詞可能（「～時間」のように他の語を修飾するものとして使用されているもの）として分類されていた。

抽出語の共起ネットワーク（媒介中心性）を作成したものが図 1 である。共起ネットワークとは、「出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク（樋口、2014）」であり、語と語が線で結ばれていることにより、それらの語の間に強い共起関係（語と語が同時に出現する関係）があることになる。共起ネットワークを作成することにより、語と語の関係を可視化して捉

表 1 テキストデータの概要

	困っていること	授業のアイデア・工夫
総抽出語数 (使用)	6,449 (2,982)	5,588 (2,578)
異なり語数 (使用)	1,163 (923)	1,375 (1,140)
文	836	603
延べ回答件数	386	272

えることができる。また、媒介中心性の共起ネットワークでは、ネットワーク構造においてどの程度中心的な役割を果たしているかを色分けによって表されており、媒介中心性が高い順に、ピンク・白・水色の円で示されている。これをグレースケールに変換すると、円の色が濃いもの程、媒介中心性が高くなっていることになる。図 1 では、語と語の関係をより分かりやすくするため、強い共起関係ほど太い線で描かれ、出現数の大きい語ほど大きい円で描かれている。「授業時間数」と「少ない」、「時間」と「準備」の円がそれぞれ重なっているが、これらは出現数の大きい語ほど大きい円で描かれているため、それぞれの語は線でつながれているものである。なお、今回分析対象となる記述内容は 386 件と小規模のデータであることも考慮し、共起ネットワーク作成オプションにて、描画数を標準設定の 60 から 50 に変更し、「最小スパニングツリーのみを描画する」に設定して描画を行った。

図 1 から「困っていること」の特徴を捉えると、「授業時数が少ない」、「調理実習の後片付けや授業準備の時間」、「調理実習室や被服実習室の施設・設備」、「意欲や基礎力の低下と技術指導」、「被服製作における能力の個人差」、「家族や家庭環境への配慮」、「分野による学習内容の進捗の悩み」、「説明の仕方」、「技術科と家庭科の関係」、「生徒自身の生活」といった内容のまとまりが登場している。そして、これらの内容を大別すると、家庭科教員が授業実践の課題として考えている事柄として、「時間」「施設・設備」「授業の進め方」「教科の位置付け」の 4 つのカテゴリーに関する課題が浮かび上がってくる。次に、カテゴリーごとの課題とされる内容について詳細をについて見ていくことにする。

3.3 「困っていること」からみた授業実践の課題

3.3.1 「時間」

図 1 の共起ネットワークより「時間」に関する授業実践の課題について取り出したものが図 2 である。「少ない」と「授業時数」、「時間」「準備」「後

片付け」「調理実習」などの語による 2 つの共起関係より、課題とされる「時間」には、授業の時間と授業以外の時間の 2 つの内容が含まれていると考えられる。授業の時間では授業時数の不足、授業以外の時間では授業準備や教材研究の時間の不足が課題とされていることが示されている。それぞれ、KWIC コンコーダンスを用いて記述内容の詳細を確認していくと次のような内容が記述されていた。

○授業の時間に関する課題の記述例

- ・「家庭基礎」2 単位で学習時間が少ない
- ・中学、3 年の授業時数が少ない (隔週 1 週間)
- ・年間授業時間が少なく時間をかけて掘り下げた授業をすることに限界がある
- ・もっと実技・実習の時間を確保したいが時間数の制約があつてなかなか確保できない
- ・授業時間が少ない (少なすぎる)
- ・授業時間数が少ないため、実習時間や生徒が考える時間が十分にとれない
- ・単位数が少ないため、週に 1 回の授業となり定着しにくい

○授業以外の時間に関する課題の記述例

- ・授業以外の校務に時間がかかりすぎて、教材の準備時間が不足している
- ・時間が足りない、非常勤なので勤務時間内に仕事が終わらない
- ・教材研究の時間が不足
- ・中学校：調理実習について、1 時間の枠内でやれるものが限られている。実習をするために、前日の放課後から準備 (係をそれぞれの班から出す)。当日の昼休み、放課後まで使ったの後片付け
- ・実習を多くしているので、準備・後片付けの時間がかかる (のに他教科とは扱いは同じ)
- ・調理実習が時間内に終わらない、でも、簡単すぎる内容にはしたくない

表2 「困っていること」について抽出された頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
生徒	133	後片付け	9	受験	6	経験	4
授業	62	大きい	9	進度	6	言葉	4
時間	43	低下	9	体験	6	個別	4
実習	40	評価	9	対応	6	工夫	4
授業時数	37	プリント	8	入る	6	講義	4
多い	34	教科	8	1つ	5	持てる	4
少ない	24	高校	8	グループ	5	実習室	4
調理実習	23	作る	8	扱い	5	週	4
指導	21	作業	8	家庭基礎	5	集中	4
不足	19	針	8	確保	5	十分	4
生活	17	忘れ物	8	学習	5	食	4
内容	17	教員	7	学年	5	寝る	4
難しい	17	教室	7	活動	5	進む	4
被服製作	17	個人	7	関係	5	数	4
差	16	古い	7	関心	5	調整	4
準備	16	考える	7	技術科	5	伝える	4
大変	16	施設	7	教科書	5	班	4
調理実習室	15	持つ	7	苦手	5	不備	4
家庭科	14	終わる	7	合わせる	5	複数	4
思う	14	出す	7	糸	5	名前	4
生徒自身	14	食べる	7	実験	5	予算	4
ミシン	13	先生	7	足りない	5	養護学校	4
家庭	13	増える	7	男子	5	話す	4
教える	13	単位	7	道具	5	いろいろ	3
中学校	12	担当	7	悩む	5	おしゃべり	3
被服実習室	12	調理	7	能力	5	びっくり	3
使う	11	被服	7	配慮	5	エプロン	3
説明	11	必要	7	開く	5	ゲーム	3
意欲	10	問題	7	すべて	4	テスト	3
教材	10	やる気	6	エアコン	4	ホームプロジェクト	3
設備	10	課題	6	クラス	4	意識	3
分野	10	環境	6	ワーク	4	違い	3
無い	10	基礎	6	悪い	4	家庭科教員	3
理解	10	興味	6	違う	4	解決	3
家族	9	材料	6	家	4	確認	3
学校	9	作品	6	科目	4	簡単	3
技術	9	自分	6	学ぶ	4		
言う	9	実技	6	楽しい	4		

表 3 「困っていること」について抽出された品詞別出現回数 (上位 10 語)

名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数	形容詞	出現回数	形容動詞	出現回数
生徒	133	授業	62	多い	34	大変	16
授業時数	37	実習	40	少ない	24	必要	7
調理実習	23	指導	21	難しい	17	苦手	5
内容	17	不足	19	無い	10	個別	4
被服製作	17	生活	17	大きい	9	十分	4
調理実習室	15	準備	16	古い	7	いろいろ	3
生徒自身	14	説明	11	悪い	4	簡単	3
家庭科	14	設備	10	楽しい	4	困難	2
ミシン	13	理解	10	早い	3	自由	2
家庭	13	低下	9	遅い	3	重要	2

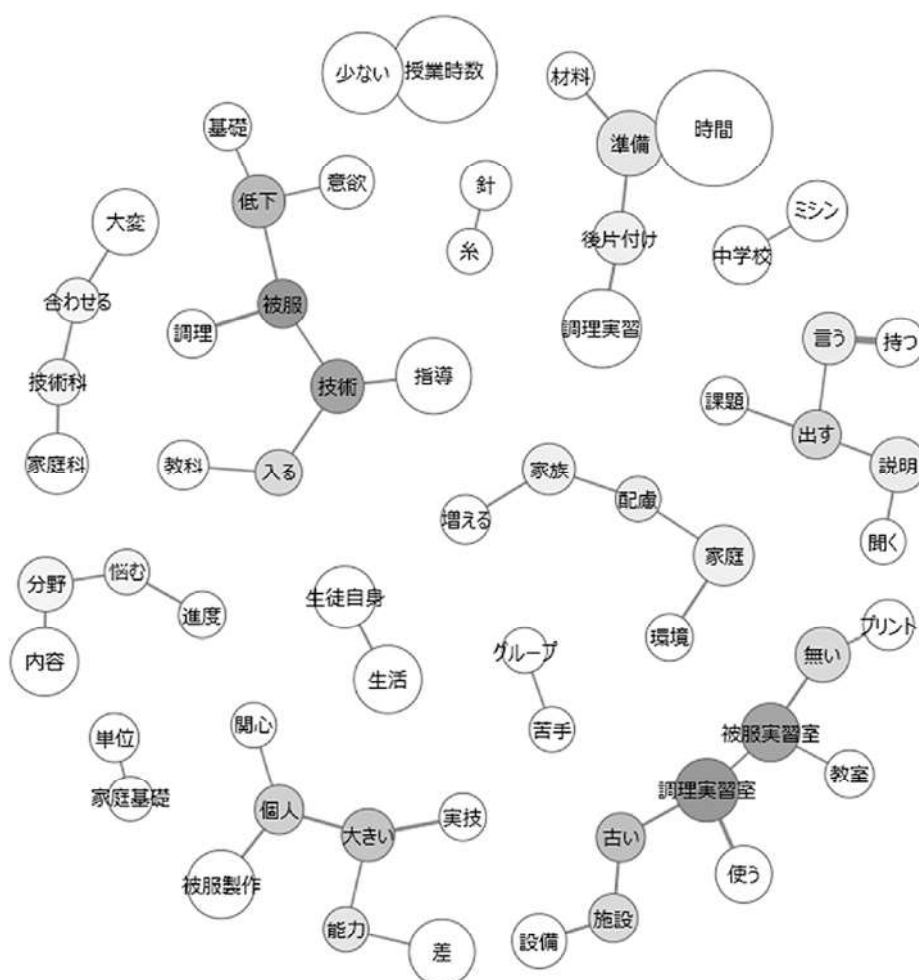


図 1 「困っていること」の共起ネットワーク (媒介中心性)

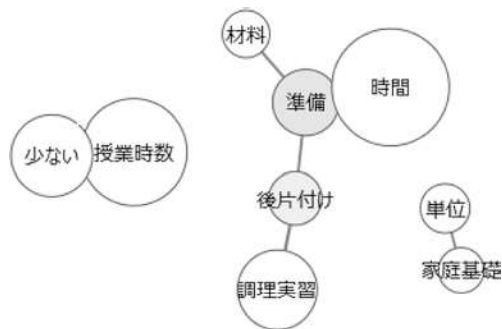


図2 「時間」に関する課題の共起ネットワーク例

3.3.2 「施設・設備」

「施設・設備」に関する課題の共起ネットワークが図3である。「調理実習室」や「被服実習室」の実習室が学内には置かれていないこと、実習室が置かれていても、設備が老朽化していたり、用具がそろっていないかったりするため、授業に支障を来している様子が示されている。図3の共起ネットワークに挙げられている語から記述内容を確認すると、実習室や用具に関する施設・設備の問題だけでなく、普通教室と特別教室の設備の違いによる授業への影響が見えてきた。近年、私学のみならず公立でも通常教室にはエアコンが設置されている学校が増えていることから、夏場の授業では、生徒自身がエアコンのある環境での学習に慣れてしまっており、その結果としてエアコンが設置されていない実習室での授業進行に影響を与えているという記述がされていた。

○施設・設備に関する課題の記述例

- ・調理実習室・被服実習室が無いための、準備・後片付け等の不便さ
- ・実習室がないので、調理実習ができない
- ・被服実習室がない
- ・調理室の施設が古く使いづらい
- ・調理室の設備、用具の不備、清掃の不足→意欲低
- ・ミシンが古く、台数も十分ではない
- ・家庭科室の整備（ミシンの不備、針折れなどを放置、使おうとした時使えない→意欲低下）
- ・普通教室はエアコンがあるのに被服室・調理室はない。私は耐えられるけど、生徒はやる気ダウン。
- ・被服室があつくと夏はだらけてしまい、冬は寒くてなかなか暖まらない

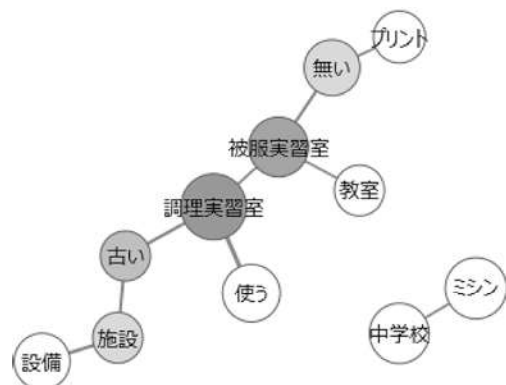


図3 「施設・設備」に関する課題の共起ネットワーク例

3.3.3 「授業の進め方」

「授業の進め方」に関する課題の共起ネットワークが図4である。「個人」「大きい」「能力」につながれている語から、個人の関心や技能の能力差が大きくなっていることが課題として示されている。また、「被服」「低下」「技術」につながれている語より、被服分野における技術面での指導に課題があることが見える。さらに、「家族」「配慮」「家庭」につながれている語から、授業内容における家庭や家族環境への配慮をどうするかという課題や、「出す」「言う」「説明」につながる語から授業での指示の出し方の問題、「分野」「悩む」につながる語から学習内容による進度の違いに対する課題があることが見えてきた。「授業の進め方」に関する課題には、指導方法に関する課題、学習内容に関する課題、生徒の意欲や能力の低下に関する課題などの内容が含まれていた。記述内容の詳細を確認すると、家庭科の学習に対する意欲や、家庭科で学習する基礎的・基本的な知識及び技能の習得状況の生徒間の差が、指導方法や学習内容に影響し、授業の進め方全体に関わる課題となっている現状が記述されていた。

○授業の進め方に関する課題の記述例

- ・生徒の能力差が大きく一斉指導が難しい
- ・生徒の生活力が低下していて、実習などでも説明をとっても多く必要とする
- ・衣服製作等で説明を聞いても自分にいかせない、ピンポイントで説明してもらえないとできない
- ・一度の説明で理解できず、個々に生徒が質問来る。個別指導に慣れている生徒は「私はど

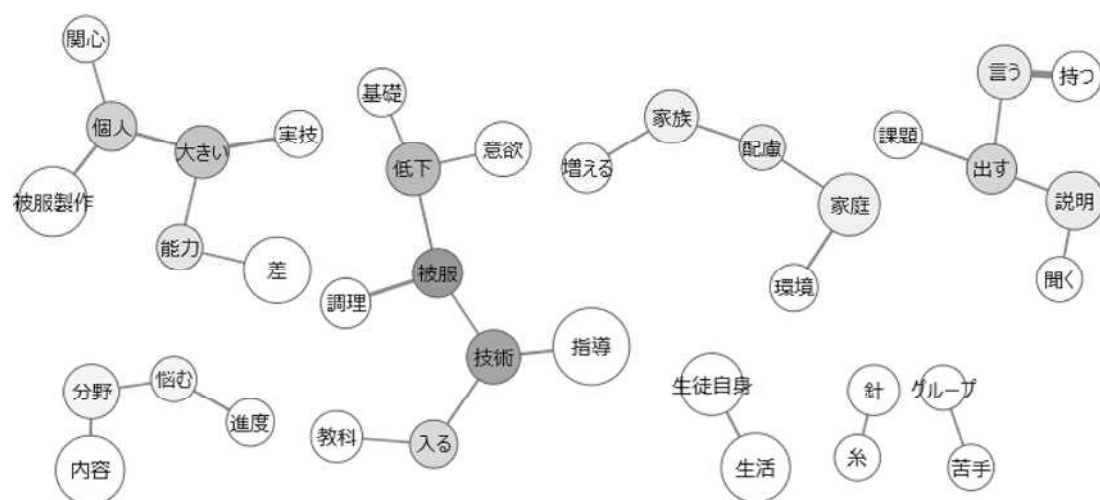


図4 「授業の進め方」に関する課題の共起ネットワーク例

うすればいいのでしょうか?」という指示が出されないと動けない。

- ・家庭生活、家族関係が複雑な生徒が増え、自分の家族を連想する授業をしたくないが、どのような授業をしたらよいかわからない
- ・実習時、進度差、意欲差、実力差が大きく、どこに標準を定めるべきか悩む
- ・生徒の家庭による違いの大きさ、格差、複雑な家庭
- ・家族や個人の問題に配慮が難しい
- ・年々子どもたちの調理や被服の技術が低下している（できなくなっている）
- ・衣服製作等で針に糸が通せない
- ・毎時、作業等を入れたいが、そうはいかない分野もある
- ・分野や内容によっては生徒の関心を引きつけにくい
- ・自分の生活に無関心、問題点や社会の疑問点が持てない

3.3.4 「教科の位置付け」

「教科の位置付け」に関する課題の共起ネットワークが図5である。「技術科」「合わせる」「大変」の語から、中学校の教科区分では技術・家庭科で1教科とされており、この教科の位置付けによる課題が示されている。記述内容の詳細を確認すると、技術科と家庭科で授業は別々に行われているが、成績評価の段階になると1つの教科として評価しなくてはならないことへの困難さが記述されていた。また、「家庭科」という語には、「技術科」との関係が



図5 「教科の位置付け」に関する課題の共起ネットワーク例

けはなく、学校内での生徒や他教科担当教員による、家庭科への見方による授業への影響も記述されていた。

○授業の進め方に関する課題の記述例

- ・中学、技術分野と家庭分野を合わせて成績つけるのが難しい
- ・「技術」と「家庭」は1つの教科として捉えられているが、現場の教員配置では問題が生じている（片方しかない！とか）
- ・技術・家庭で1時間ずつ分けているので、裁縫の実技実習時間が短い（個々への対応）
- ・受験科目ではないので生徒が家庭科授業を軽んじてしまうこと、授業も集中しない

・生徒は、家庭科は基軸教科に比べ低いと思っている

3.4 「授業のアイデア・工夫」の分析結果

「授業のアイデア・工夫」の記述より、共起ネットワークを作成したものが図6である。サブグラフ検出(媒介)による抽出で共起ネットワークの図を描くことで、比較的強くお互いに結び付いている部分がグループごとに色分けして示されている。

各グループでつながれている語から、生徒が興味・関心を持って授業に取り組めるよう実践していることとして、動画の活用、実物を実際に見せる、実技テストの実施、評価の仕方の工夫、色分けや色の変化を見せるといった色の活用などが確認された。

4. まとめ

グループワークの記述をもとに、計量テキスト分析の手法を用いて分析を行った結果、家庭科教員が授業実践において課題であると考えている事柄として、以下の点が明らかとなった。

- ・家庭科の授業を行うための授業時数が不足しており、授業準備や教材研究の時間も不足している。
- ・「調理実習室」や「被服実習室」などの実習室が学内設置されていなかったり、実習室が置かれていても、設備の老朽化や用具が不足していたりすることにより、行える授業内容が制限されている。
- ・生徒の家庭科学習に対する意欲や、家庭科で身に付ける基礎的技能の習得状況が低下している

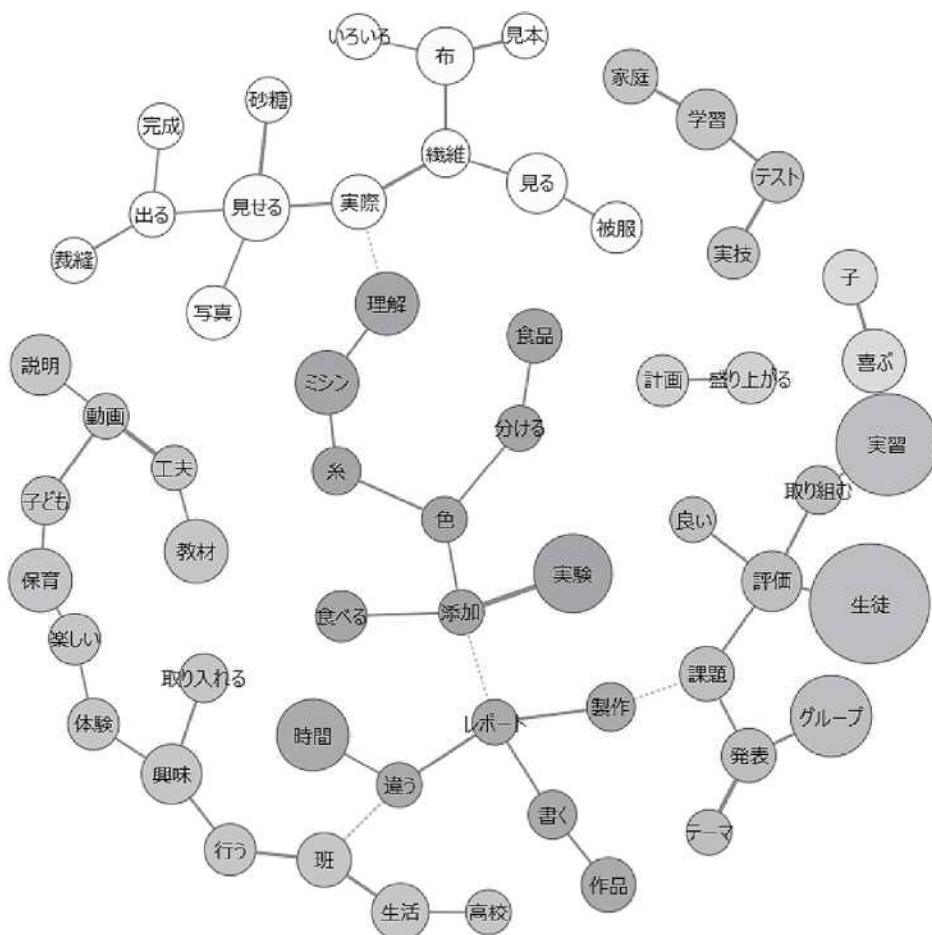


図6 「授業のアイデア・工夫」の共起ネットワーク(サブグラフ検出・媒介)

ことにより、指導方法や学習内容に影響が現れ、思うように授業が進められない。

- ・技術科と合わせて 1 教科と見なされていることにより、授業時数や教員配置、成績評価について問題があると感じている。

また、授業のアイディア・工夫として記述されている内容から、家庭科教員が効果的だったと感じている内容として以下のことが挙げられていた。

- ・動画や実物、色分けなどによる教材・教具を活用することで、生徒の興味・関心を引きつけ、授業内容への理解も深まる。
- ・実技テストを実施することで、生徒 1 人 1 人の技能の定着化がはかれる。
- ・学習内容の評価の仕方を工夫することで、生徒が意欲的に取り組むことができる。

以上により、テキストデータを可視化しながら全体像を捉えていくことで、生徒の学習意欲や技能の実態が指導方法や学習内容に影響を与え思うように授業が進められず、教員がねらいとする授業を行うことができないことにより生徒の知識や技能が低下し、生徒は「できない」「わからない」ことにより学習意欲が低下していくという悪循環がくり返されている様子を確認することができた。家庭科で学習する基礎的・基本的な知識及び技能の定着を高めていくには、生徒の学習意欲を高めることが大切であり、そのためには家庭科の学習に関心をもってもらい必要がある。教員は、生徒が何に興味関心をもっているのかを常にリサーチしながら、授業内容を生徒の興味関心に近づけアレンジしていく力も高めていく必要があるだろう。

引用参考文献

- 1) 後藤康志, 松井賢二, 生田孝至. 計量テキスト分析による教員免許状更新講習ニーズの可視化. 新潟大学高等教育研究. 第 2 巻. 2015
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会. 教育課程部会 (第 95 回) 配付資料 資料 2 教育課程規格特別部会 論点整理 (案) 補足資料 (1).

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afiedfile/2015/09/04/1361407_2_1.pdf (入手日: 2015 年 9 月 3 日)

- 3) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会. 教育課程部会 (第 95 回) 配付資料 資料 3 教育課程規格特別部会 論点整理 (案) 補足資料 (2).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afiedfile/2015/09/04/1361407_2_2.pdf (入手日: 2015 年 9 月 3 日)
- 4) 日本家庭科教育学会家庭科教育問題研究委員会. 高等学校家庭科男女必修の成果と課題—高校生・教師・社会人調査の結果—. 日本家庭科教育学科. 2007
- 5) 長澤由喜子, 荒井紀子, 鎌田浩子, 亀井佑子, 川邊淳子, 川村めぐみ, 齋藤美保子, 新山みつ枝, 鈴木真由子, 中西雪夫, 野中美津枝, 綿引伴子. 高等学校家庭科の履修単位数・教員の配置にかかる実態—全国高等学校家庭科指導主事 2009 年度調査を通して—. 日本家庭科教育学会誌. 54(3): 185-194. 2011
- 6) 野中美津枝, 荒井紀子, 鎌田浩子, 亀井佑子, 川邊淳子, 川村めぐみ, 齋藤美保子, 新山みつ枝, 鈴木真由子, 長澤由喜子, 中西雪夫, 綿引伴子. 高等学校家庭科の履修単位数をめぐる現状と課題: 16 都道府県の実態調査を通して—. 日本家庭科教育学会誌. 54(3): 175-184. 2011
- 7) 野中美津枝, 荒井紀子, 鎌田浩子, 亀井佑子, 川邊淳子, 川村めぐみ, 齋藤美保子, 新山みつ枝, 鈴木真由子, 長澤由喜子, 中西雪夫, 綿引伴子. 高等学校家庭科の単位数をめぐる現状と課題: 21 都道府県の家庭科教員調査を通して—. 日本家庭科教育学会誌. 54(4): 226-235. 2012
- 8) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—. ナカニシヤ出版. 2014
- 9) 文部科学省. 高等学校学習指導要領解説 家庭編. 開隆堂出版. 2010
- 10) 文部科学省. 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編. 教育図書. 2008
- 11) KH Coder Index Page. <http://khc.sourceforge.net/> (入手日: 2015.7.31)